

タガログ語のアクセントに関する覚え書き*

——物理アクセントと心理アクセント——

森 口 恒 —**

Some Remarks on Tagalog Accents

——Physical Accents vs. Psychological Accents——

Tsunekazu MORIGUCHI

This paper reports the results of an investigation into the linguistically relevant acoustic correlates ('pitch', 'amplitude' and 'time-duration') in Tagalog. The acoustic correlates were measured by means of a sona-graph and a pitch indicator at the Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo.

The result of this study shows that only 'time-duration' functions as a phoneme. As the Tagalog language is a 'syllable-timed' language, the length of syllables is equal except that of syllables which form the accent.

The 'time-duration' accent is not physically the protraction of the accented syllable, but is (1) the shortening of the syllable that precedes the accented one or (2) the occurrence of the accented syllable in the initial position. Psychologically, the accented syllable impresses hearers as being longer than other syllables in the word, though, in fact, all syllables are equal in length, except for the one which precedes the accented syllable.

* この小論は、1976年に、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で行なった実験の結果の一部をまとめたものである。

使用した器機は、

1. テープレコーダー
TEAC R 314 C
SONY TC-365
2. ソナグラフ関係
KAY 7029A (Sona Graph)
KAY 6076C (Amplitude Display & Scale Magnifier)
KAY 6077A (Timing Marker)
3. ピッチインディケイター関係
JEIC PI-3A (Pitch Indicator)
YEW 3125 (Amplifier)
YEW 62 (Photocorder)

である。

上記の機器の使用の便宜をはかっていただいた A. A. 研の皆様にお礼を申し上げたい。また、インフォーマントになっていただいた Araceli Leonor Vasquez Maglalang さん, Juan David Villanueva さんに、また、絶えず種々の面から助言をいただいた A. A. 研の土田滋助教授にここで謝意を表したい。

** 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

I

タガログ語の正書法にはアクセントの規定がある。しかし、これに必ずしも従う必要はなく、教科書的なものに多く使われるようである。正書法に規定されているアクセントマークは、 $\cdot$, $\acute{\cdot}$, $\hat{\cdot}$ の三種があり、これらのアクセントマークは、アクセントだけを示しているのではなく、単一の音声現象をも含んだ複合形態を保っている。すなわち、いわゆる Sprasegmental な音素—アクセント—と声門閉鎖 (Glottal Catch) の二種の複合形態である。

アクセントに関しては、最後の音節 (Ultima) と最後から二番目の音節 (Penultima) にあるものの二種があり、声門閉鎖は、あるかないかの二種にわかれる。上記の組み合わせにより次の四通りが考えられる。

	アクセント	声門閉鎖
1. CVCVCV	Penultima	—
2. $\acute{\text{C}}\acute{\text{V}}\text{CVC}\acute{\text{V}}$	Penultima 以外の音節	—
3. CVCVC $\grave{\text{V}}$	Penultima	+
4. CVCVC $\hat{\text{V}}$	Ultima	+

[例]

1. goma [góma] (= ゴム)
2. gayón [gayón] (= このように)
3. akalà [akála?] (= アイディア)
4. astâ [astá?] (= 体つき)

また、後から二音節目以外にアクセントがある場合にも、2. の $\cdot$ をその音節の上につける。²⁾

いちおう、上記のようなアクセントに関する記述がどのタガログ語の教科書、参考書にもしてある。しかし、すべてに共通することは、それ以上述べていないことであり、どんなものがアクセントであるかという定義付が全く行なわれていない。

一方、記述言語学の面から考察を加えている何冊かのアクセントに関する文献と教科書がある。Bloomfield (1917), Lopez (1941), Bowen (1965), Llamzon (1966), Schachter & Otones (1972) である。

Bloomfield (1917) の pp. 141–145 に詳細な耳によるアクセントの分析が行なわれている。彼の示しているアクセントの形態の中心は、強弱 (Stress) であり、その他にピッチ (Pitch) の変化についても述べている。

彼のアクセントの記述は、語根、語幹、単語(語根+接辞)、句とそれぞれのレベルにおいて

1) ここでは長さは示さない。

2) この小論においては、正書法のアクセントマークを使わず ' $\cdot$ ' によってアクセントの位置を示す。

アクセントの事実を詳しく記述してある。しかし、そのレベルレベルでのストレス、ピッチを統一性なく記述しているだけで、アクセントに関する統一的理解も出していない。しかし、それぞれの語の派生関係とアクセントの移動は、生成音韻論的手法を使って述べている。

一方、Bloomfield (1917) をそのまま受け継ぎ、それに加えて派生関係とアクセントの移動について簡単ではあるが述べているのが Lopez (1941) である。しかし、ここでもアクセントの内容が何であるかは述べていない。

1960年代になるとアメリカのカリフォルニア大学系のタガログ語の教科書、文法書、(Bowen, 1965), (Schachter & Otones, 1972), では、強弱 (Stress) 中心説ではなく、長短 (Duration) 中心説をとっている。その際に何らかのピッチの動きも副次的な現象として述べている。

上記のような耳による音声学の結果からアクセントについて述べたもののほかに、音響音声学の面から分析を行なっているものがある。Gonzalez (1970) である。彼と彼の友人をタガログ語のインフォーマントとして使い、タガログ語のアクセントという現象を、強弱面、長短面、ピッチ面から実験をし、物理的に数値化している。その結果は、資料として非常に貴重なものではあるが、分析がうまく行なわれているとは思えない。特にその結果としての三者（強弱、長短、ピッチ）の Trading Relationships はあまり説得力もなく、三者の相関関係をはっきりさせる規則化を行わず、最終的にはアクセントが何であるかをはっきりさせてはいない。

II

1. アクセント

I 章において、現在までに発表されたタガログ語のアクセントに関する文献について検討した。しかし、どの論文をとってみても必ずしも説得力があると考えられないし、また、はっきりと結論を出そうとはしていないと考えられるものもあった。そこで、この小論の後半では、新たに実験を行ない、そのデータをもとにしてタガログ語のアクセントはいかなるものかを考えてみたい。³⁾

この小論におけるアクセント (Accent) と呼ばれるものは、いわゆる Sprasegmental なもの全体をさし、その下位区分としては、強弱要素 (Stress prominence), 高低要素 (Pitch prominence), 長短要素 (Duration prominence)⁴⁾ の三種の基準により、“ストレス・アクセント”、“ピッチ・アクセント”、“長さアクセント”がある。

2. タガログ語のアクセント

どの言語をとってみても、音声的には必ず三種の要素—強弱、高低、長さ—を持っている。

3) この小論においては、生成音韻論的な派生とアクセントの移動については言及していない。基本的なアクセントについて考察を加えただけである。

4) Prominence は、日本語に直すと特徴であるが、ここでは要素と訳した。

しかし、それが音素として働いているかどうか、言語の分析の場合には問題なのである。そこで、まずタガログ語において三要素のいずれが音素として働いているかを検討する必要がある。

音素として三種の要素が認められるためには、必ずその要素の交替によって、異なる単語として認知されなければいけない。すなわち、それらの要素により、対立が生み出されなければならない。⁵⁾

そこでここでは、つづり(音素表記)⁶⁾の同じもので、アクセントにより異なる単語とされているものの組み合わせをつくり、それぞれをソナグラフとピッチインディケイターを使い、どの要素を主にしてアクセントが働いているかを示してみたい。ここでは、まず、CVCV $\left\{ \begin{smallmatrix} ? \\ h \end{smallmatrix} \right\}$ (二音節語)だけについて分析する。

(i) 強弱要素

この強弱要素は、ソナグラフを使い、音圧 (Amplitude) の指示の変化をみることによって分析を行なう。この場合、この音圧は絶対値を使って分析するのではなく、その単語ごとに決定される基本線からのオーディオカーブの距離の変化をみて、パターン化を行ない考察してみた。⁷⁾

正書法によってアクセントが指定されている音節の音圧が高くなる場合もあるし、その音節を構成する音により音圧の変化がみられる場合もある。しかし、一般的には語頭から語末にかけて、漸次、音圧が減少してゆく傾向がある。その際、第二音節にアクセントがあると考えら

れている単語の語末(第二音節)の音圧の減少率は、第一音節にアクセントがあるとされている単語の第二音節の音圧の減少率より低くなっている。

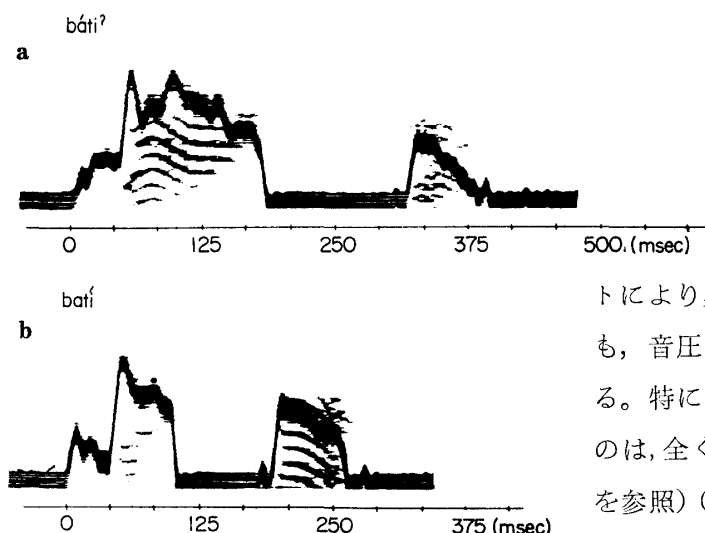


図 1

また、二つの単語がアクセントにより異なる意味を持つと感知される場合にも、音圧の変化のパターンが全く同じ場合がある。特に、時間軸を無視すれば、同じつづりのものは、全く同じ音圧の変化を示す。(図 1-a, b を参照) (bati? = あいさつ, bati = 混ぜる, ねる)

図 1, 2 により、強弱要素は別の単語として

5) cf. Trubetzkoy, 1939, p. 32.

6) タガログ語の文字は古くからあったが、現在はそれを使わず、アルファベットを使い、音素表記をしている。

7) この音圧は、マイクにより電圧に変えられたものを計るために、マイクからの距離、マイクの特性、音の種類により必ずしも絶対値を得られるとは限らない。

認知させるだけの情報を与えていないことがわかる。また、Gonzalez (1970) に述べてあるアクセントが指定されている音節の指定されていない音節に対する音圧についての陵駕率は三種の要素の最低値を示す。⁸⁾したがって、強弱要素に関しては次のように結論することができる。強弱要素は音素として働いておらず、単語を識別させ機能を持たず音声的副次的なものと考えられる。(II-(iv)において副次的な面について考察する)

(ii) 高低要素

高低要素は、ソナグラフの狭帯域のフィルターを使い、そのフォルマントの変化をみると、ピッチインディケイターの指示によって計った。ピッチに関しては、絶対値を出せるが、

アクセントの場合、そのパターンが問題であるため、細かい数値は示さず、ピッチ曲線を使った。

ピッチの変化も強弱と同様に統一性は示さないが、一般傾向としては、語末において何らかのピッチの変化が認められる。特に、第二音節にアクセントが指定されている単語の語末の音節

に急激な変化がみられる。(図2-a, bを参照)
(báli? = 横の割れ目, bali? = ひび)

図2-aが示すとおり、第一音節にアクセントが指定されている場合には、語頭から語末にかけてピッチの変化がほとんどなく、音節末にはほんの少しだけピッチの変化がみられる。一方、図2-bにおいては、第二音節にアクセントの指定がある場合には、第二音節に著しいピッチの変化がみられる。

もし、タガログ語のアクセントがピッチアクセントであるとすれば、平板型か、上昇か下降かの三種と考えられる。しかし、図2-bと図2-cを比較する事により上昇と下降の二種があることがわかる。すなわち、三種ではなく平板型と変化型の二種となる。しかし、ある単語を上

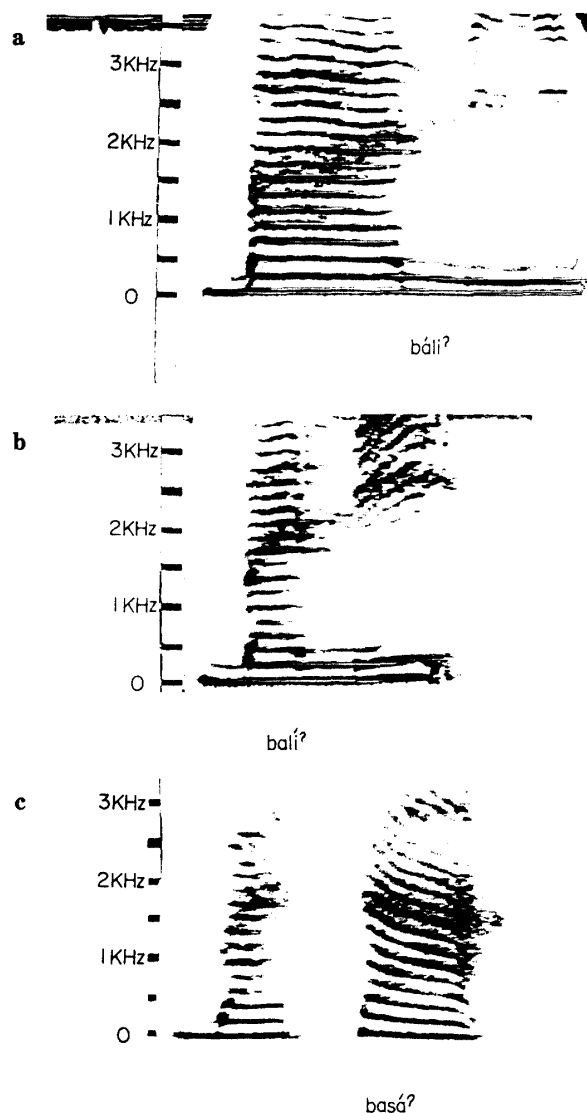


図 2

8) Gonzalez, 1970, p. 14.

昇型から下降型に変えても別単語として弁別されず、同じ単語を何日か間をおいて同じインフォーマントに発音してもらった時に上昇型が下降型になる場合

もある。(basá[?]=ぬれる)

また、図3-a、図3-bにより、二種の単語がアクセントにより区別されているにもかかわらず、ピッチに関しては変化していないことがわかる。

したがって、ピッチも音素としては機能していないことがわ

かる。しかし、アクセントを知覚する補助の役目をしている可能性がある。(cf. III-iv) (búbo[?]=こぼす, bubó[?]=こぼれた)

ピッチに関しては、次のように結論することができる。語末にアクセントが指定されている場合には、語末に急激なピッチの変化がある。しかし、その方向は一定していない。第一音節にアクセントが指定されている単語のそれぞれの音節には、目立ったピッチの変化がない。それゆえ、ピッチは音素として働いていない。

(iii) 長さ要素

ここで言う長さは、音節の時間の長さをいう。図4-aの例では、①のマイクロフォンに音が入り、電圧を生じさせた点から、母音が終わった点②までの時間、②から③までの時間をさす。特に重要なことは、音と音との切れ目の空白部分も次の音節として組み込むということである。

前に述べた強弱、ピッチは、時間軸に対する音圧軸(電圧)、周波軸の変化率、すなわち時間tに関して微分を行なったものがパターンとして取り出せる。しかし、時間の長短の場合には数量的な音節の長さが問題になる。この場合、アクセントはパターンが問題であるために、絶対値を使わず、変数(パラメーター)を考慮に入れ数値を使う必要がある。しかし、便宜上、この小論では絶対値を使っている。

図4-a、bをみると、視覚的には図4-aの第一音節、第二音節、図4-bの第二音節の長さは等しい。実際の時間は、

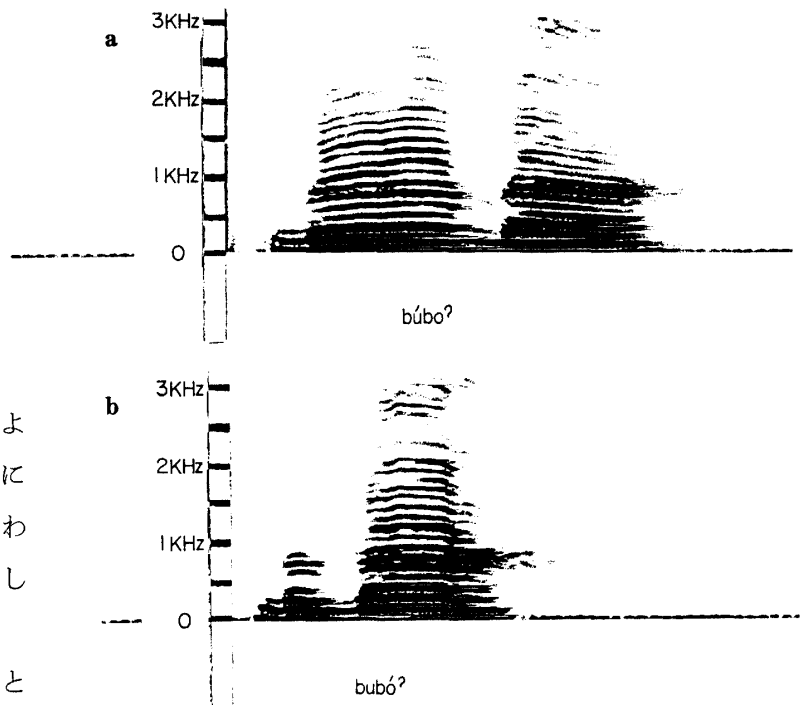


図 3

図 8

bá = 187 (msec)

ti? = 208 (msec)

(báti? = あいさつ)

図 9

ba = 104 (msec)

tí = 166 (msec)

(bati = 混ぜる, ねる)

一般的な $C_1V_1C_2V_2$ の音節の長さの平均値は次のようである。

$C_1\acute{V}_1C_2V_2\left(\left\{\begin{smallmatrix} ? \\ h \end{smallmatrix}\right\}\right)$

$C_1\acute{V}_1 = 198$ (msec)

$C_2V_2 = 209$ (msec)

$C_1V_1C_2\acute{V}_2\left(\left\{\begin{smallmatrix} ? \\ h \end{smallmatrix}\right\}\right)$

$C_1V_1 = 120$ (msec)

$C_2\acute{V}_2 = 210$ (msec)

上記の平均値が示すように、第一音節にアクセントがあると言われている場合には、 $C_1\acute{V}_1$ 、 C_2V_2 の長さがほぼ同じである。一方、第二音節にアクセントがあると言われているものについ

ては、 C_1V_1 の長さは $C_2\acute{V}_2$ の長さのほぼ半分であり、 C_2V_2 の長さは、第一音節にアクセントがあるとされている単語の各音節の長さとはほぼ同じである。

ところで、上記のように物理的長さはほぼ同じであるのに対し、第一音節にアクセントがあるとされている時には、第一音節が長く感じられ、第二音節にアクセントがあるとされている場合には、第二音節が長いと感じられるのはどうしてであろうか。

このように感じるのは、実際の物理的な長さではなく、前または後の音節に比べて長いと感じる相対的な長さ、すなわち、心理的長さを感じるからだと考えられる。

この心理的長さは、 $C_1\acute{V}_1C_2V_2$ の場合にはアクセントの指定のある音節の前に何も音節がないこと、 $C_1V_1C_2\acute{V}_2$ の場合には前の音節にその原因があるのではないだろうか。すなわち、前に何もなかった場合と前の音節が短い場合に、語頭の音節、または次の音節が長く聞こえるということである。

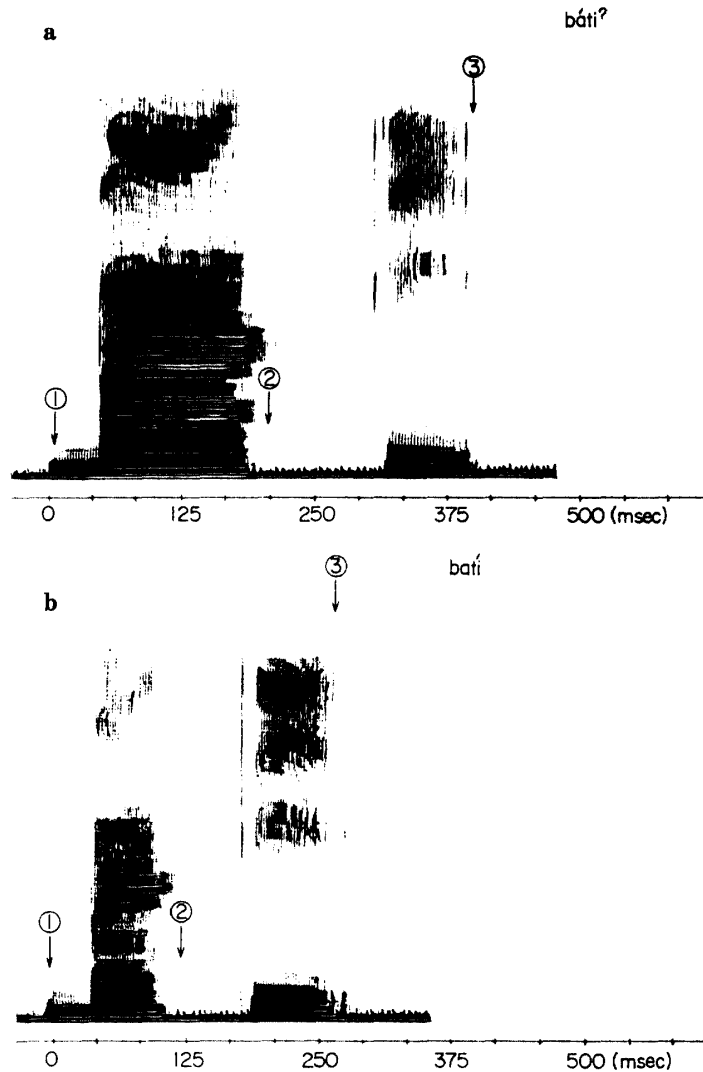


図 4

次に、長さが音素として役立っているかどうか考えてみよう。

図8, 9と前の平均値により長さがアクセントとして機能しているのがわかる。しかし、アクセントの指定のある音節の「長さ」が長くなるのではなく、前の音節の「有無」または「短さ」により、指定された音節が長いように聞こえ、それを感知して単語を弁別するのである。言い換えれば、タガログ語の一般的音節の長さは一定であり、その長さが短くなることにより、次の音節にアクセントがあるように聞こえさす、これがタガログ語のアクセントである。この長さの一定さ (Syllable timed) がタガログ語のアクセントをつくりあげているものである。[cf. Llamzon (1966), Gonzalez (1970)]

(iv) 三要素（強弱、ピッチ、長さ）の相関関係

前節まではそれぞれの要素の音素性について考察してきたが、本節ではそれらの要素の相関関係を考えてみたい。特に、長さアクセントの心理性と、ピッチ、強弱の関係についてははっきりさせてみたい。

まず強弱要素であるが、一般的には語頭から語末にかけて音圧が漸次減少してゆく傾向がある。すなわち、Syllable timed という音節の性質により単位時間あたりの圧力の減少率は一定なのである。しかし、第二音節にアクセントが指定されている場合には、その音節の音圧減少率が低い。このことは、Syllable timed で音節が一定の時間を保たねばならないのに、1/2の長さにしたために起こった副次的現象と考えられる。

次にピッチとの関係であるが、一般的な傾向としてあまり変化のないピッチも、Syllable timed ゆえに起こったと考えられる。確かに、各音節の末尾で次の調音点に移る際の口腔等の広さの変化により、ほんの少しだけピッチの変化が起こる。

ここで問題になるのは、やはり第二音節にアクセントの指定がある場合である。前にも述べたように、この場合第二音節において激しいピッチの変化を起こす。しかし、この変化は一定の方向性を示さない。そこで、この現象が第二音節にアクセントの指定がある場合に起こることを考慮に入れると、この変化は、前の音節の長さが「短く」なった場合に起こる。すなわち、このピッチの変化も前の音節の短さのためにおこった副次的現象である。

以上、強弱・ピッチ要素は、長さの変化ゆえにおこった付随的な音声現象であり、音素として働いていない。しかし、長短を感じさせる補助的な音声現象として働いているように思われる。そして、この補助的な力は強弱よりピッチの要素のほうが強いように考えられる。

上記のような物理的な面とは別に、心理的な面での三要素の関係はどうなのであろうか。すなわち、長短の聞こえと強弱要素の単調な減少現象とピッチの不変性との関係である。

第一音節にアクセントの指定がある場合には、単調減少とピッチの不変性により、実際の音節の長さは一定であるのに対し、人間の耳の鈍化と時間の感知の仕方の退行現象のために、語頭を長く聞こえさせるのである。第二音節にアクセントの指定がある場合にも、実質上も第一

音節よりも第二音節のほうが長い。それに加えてピッチの変化と強弱の減少率の軽減の相乗効果が加わってより印象的に聞こえさせるのである。

III 色々な単語の長さアクセント

今までは、タガログ語の単語の中でもっとも一般的な語根の構成をしている $CVCV\left(\left\{\begin{smallmatrix} ? \\ h \end{smallmatrix}\right\}\right)$ だけを取りあげ、アクセントについて分析を行なった。ここでは、この $CVCV\left(\left\{\begin{smallmatrix} ? \\ h \end{smallmatrix}\right\}\right)$ の枠組みをはなれ、音節数の多い単語、その他についての長さについて考えてみたい。

$$(i) C_1V_1C_2V_2C_3 \quad \left(C_1=?, C_3=\left\{\begin{smallmatrix} ? \\ h \end{smallmatrix}\right\}\right)$$

II 章において、音節の長さは一定で、あまり変化のないことを示し、長い音節と短い音節の長さの比は2:1であることも示した。しかし、ある種の単語ではこの長短の比が変化する場合

がある。

図5- a, b により

$${}^{\text{a}}\text{apo}^{\text{a}} (=C_1\acute{V}_1C_2V_2C_3)$$

(=家長)

$$\acute{V}_1 = 96 \text{ (msec)}$$

$$C_2V_2C_3 = 124 \text{ (msec)}$$

$${}^{\text{a}}\text{apo}^{\text{h}} (C_1V_1C_2\acute{V}_2) \quad (=孫)$$

$$V_1 = 42 \text{ (msec)}$$

$$C_2\acute{V}_2 = 166 \text{ (msec)}$$

となり、前者には等しい長さになっていないし、後者の場合には長短がよけいにはっきりしてくる。このことは、発話者は等時性を意識してはいるが、その子音の種類により必ずしも一定の時間を保っていない場合があることを示している。

$$(ii) (C_1) V_1C_2V_2C_3$$

一般的な (C) VCV タイプに子音が一つ加えられた場合を考えてみる。その際に CVCV タイプとの比較も行なってみたい。

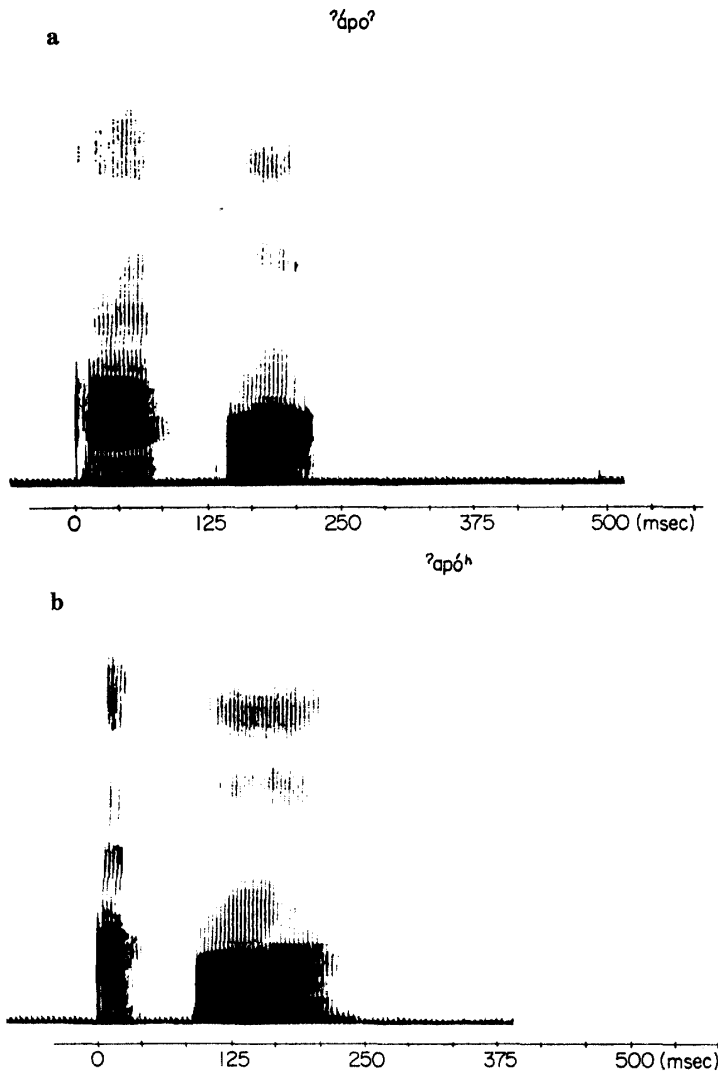


図 5

(C)VCVC の各音節の長さを
はかると二つのグループに分か
れることがわかる。⁹⁾

図6- a, b によりそれぞれの
音節の長さを計ってみると次の
ようになる。この場合、語末の
子音も別にしてはかってみた。

?anák (=C₁V₁C₂Ŵ₂C₂)

(=子)

C₁V₁= 42 (msec)

C₂Ŵ₂= 96 (msec)

C₃ = 21 (msec)

であるのに対し、図13 の ?alas
の場合は

?alás (=C₁V₁C₂Ŵ₂C₃)

(=エース)

C₁V₂= 42 (msec)

C₂Ŵ₂= 93 (msec)

C₃ =104 (msec)

となる。

この場合、全体的に音節の長
さが短いのは III-(i) の例からで

もわかると思う。しかし、アクセントの指定のある音節の長さとその前の音節の長さの比は、
2:1 になっている。ところで、上記の二つの単語の特徴的なことは語末の子音の長さである。
図でもわかるように、/k/ の場合には非常に短く前の C₂V₂ に組み込もうとしているのに対し、
/s/ の場合には、C₃ だけを独立させて一音節分の長さを保っている。/k/ と同じような形態を
示すのは、/k/ の他に /b/, /p/, /g/, /d/, /t/, /w/, /y/ であり、/s/ のような形態を示すのは、/s/

9) タガログ語の音素体系は次のようになっている。

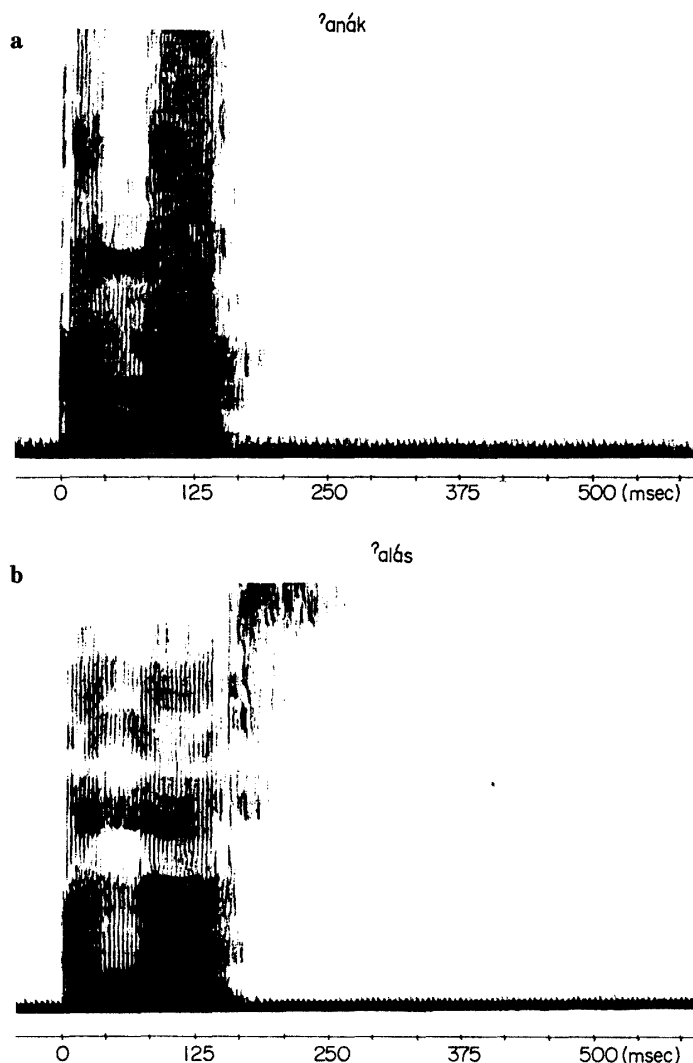
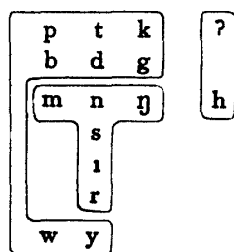


図 6

のほかに /m/, /n/, /ɲ/, /l/, /r/ である。

ここで、上記二グループの違いを考えてみよう。/b/ グループは、閉鎖音か半母音である。この閉鎖音に共通なことは、破裂させる状態に持ってゆく面とそれを破裂させる面の二面を持っていることであり、半母音の場合には、前の母音に付いて付加的役割をしている。閉鎖音の場合、この二面が完全に完了すれば、破裂閉鎖音 (Exploded stop) になるのに対し、破裂をしないで第一の面で終る場合がある。これが、内破閉鎖音 (Imploded stop)¹⁰⁾ である。また、半母音の場合も前の音に付加するということを考えても、似たような性質を持っている。すなわち、このグループは、二つの状態性を持っていなくてもその音であることがわかる。しかし、その他の子音はこの二面性がない。この違いが、先にはかった時間の違いになって出てくるの

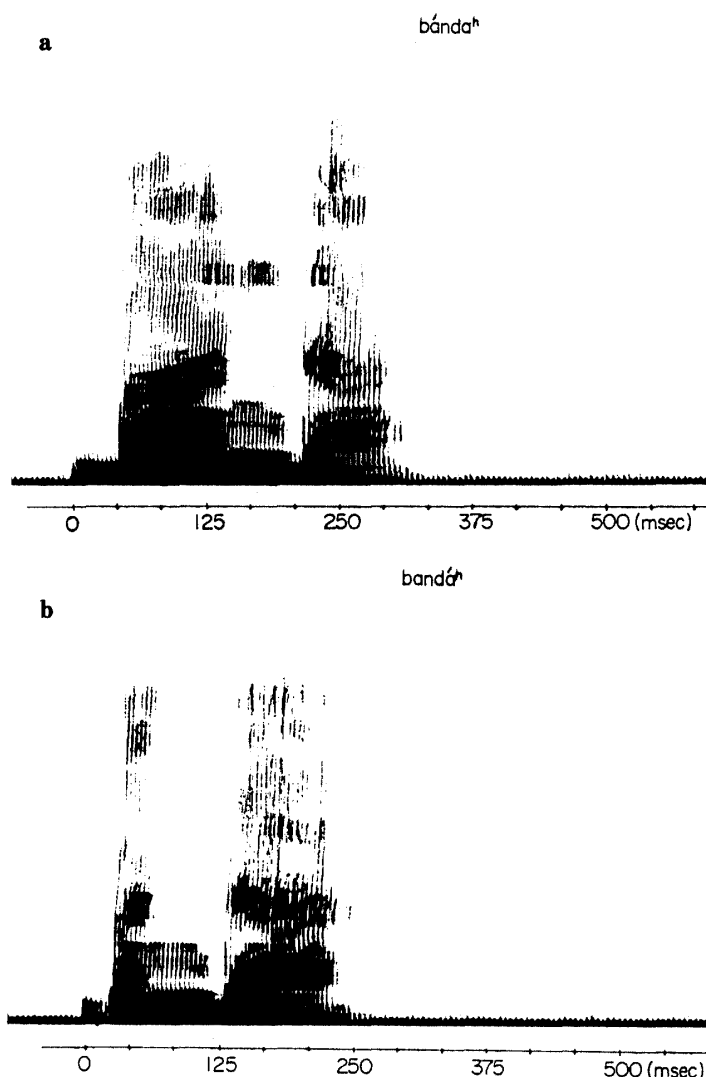


図 7

だと考えられる。すなわち、タガログ語の Syllable timed という性質により子音に影響を及ぼし、一種独特の閉鎖音のパターンを示している。

そこで、タガログ語における CVCVC のタイプの単語は、その末尾の子音の種類により、時間を中心とした音節の分かれ方が二種考えられる。

CV-CVC : /b/ グループ

CV-CV-C : その他の子音

(iii) $C_1V_1C_2C_3V_2$

(ii)と同様にタガログ語の Syllable timed 性を考えると C_2 の帰属が問題になってくる。

図7-a, b が示すように $bándah$ の場合には、

$bándah (=C_1\acute{V}_1C_2C_3V_2)$
(=音楽隊)

$C_1\acute{V}_1=146$ (msec)

$C_2 = 62$ (msec)

10) cf. Potter, Kopp Et Kopp, 1947, p. 82.

11) 閉鎖音を完全に破裂させた場合には、200 (msec) の間において発音される。

$C_3V_2=104$ (msec)
 $bandá^h$ の場合は,
 $bandá^h (=C_1V_1C_2C_3\acute{V}_2)$
 (=～のほうへ)

$C_1V_1=62$ (msec)

$C_2=54$ (msec)

$C_3\acute{V}_2=112$ (msec)

となる。

上記の数値を $ban-da^h$ と分けてはかると,

$bán=208$ (msec) $da^h=104$ (msec)

$ban=116$ (msec) $dá^h=112$ (msec)

となり, 前に述べた Syllable timed であるということに対する反証例になる。しかし, ここで, $ba-nda^h$ という分け方をしてみてもうどうであろうか。次のようになる。

$bá=146$ (msec) $nda^h=166$ (msec)

$ba=62$ (msec) $ndá^h=166$ (msec)

となり, Syllable timed であることがわかる。

ここで, $/n/$ と $/d/$ の関係を考え, 何故その子音が後の音節に組み込まれるかを考えてみたい。

ここで注目しなければならないのは $/n/$ ($[n]$) と $/d/$ ($[d]$) の違いである。この二者はほとんどの弁別要素が同じで, Sonorant と Nasal に関して違うだけである。また, 音響音声学的にも, $/d/$ ($[d]$) の前半分は, $/n/$ ($[n]$) に非常に似ている。すなわち, $/n/ \rightarrow /d/$ の順で発音する場合には, 二種の連続したものと考えず, 一つの音の少し変わったものだと考えてもよいように

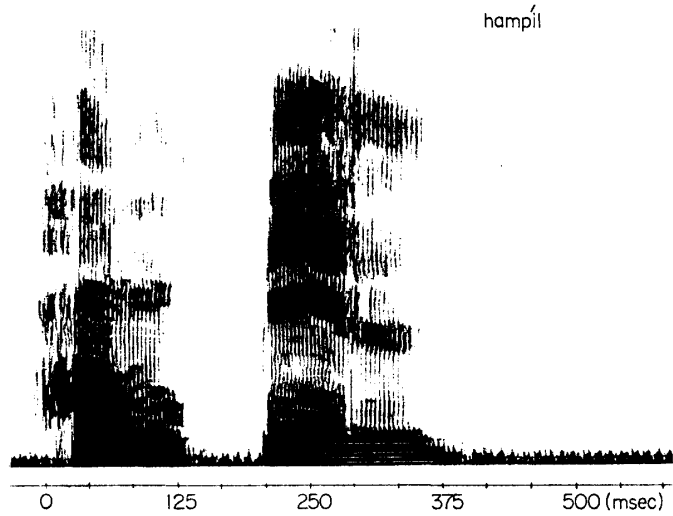


図 8

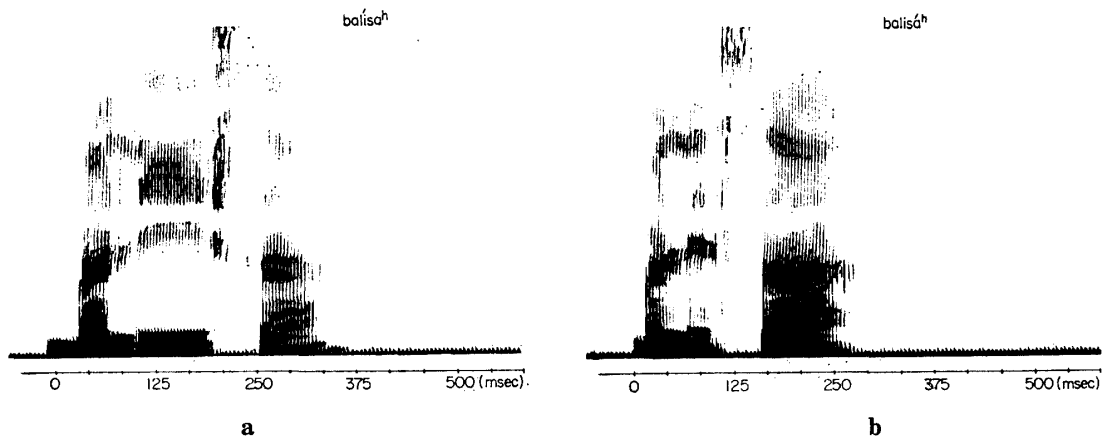


図 9

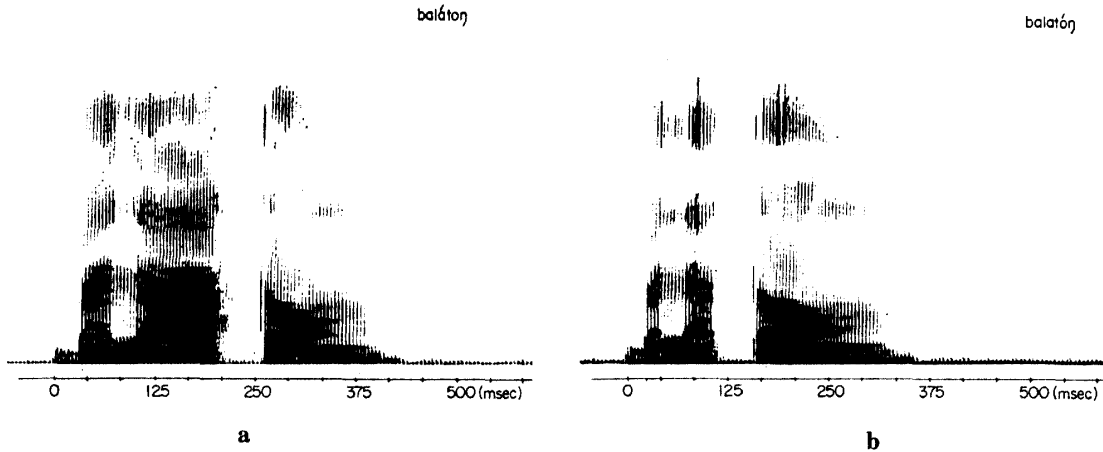


図 10

思われる。すなわち、/d/ の前半に /n/ が組み込まれたのである。このことも Syllable timed 性の裏付けになる。

このように弁別要素の共通性とその音響音声学的な共通性によりこの現象が起こったように思われる。それゆえ、子音の種類によって帰属する音節が前になったり後になったりする。

(iv) $C_1V_1C_2C_3V_2C_4$

図 8 と Ⅲ-(ii), (iii)により, hampil の場合は次のようになる。

hampil (= $C_1V_1C_2C_3\acute{V}_3C_4$) (=日の出の時の薄明)

$C_1V_1 = 83$ (msec)

$C_2C_3\acute{V}_2 = 208$ (msec)

$C_4 = 83$ (msec)

となり, ここでも Syllable timed であり, アクセントの指定のある音節とその前の音節の比は 2 : 1 になっている。

(v) $C_1V_1C_2V_2C_3V_3$

この例としては, balísa^h と balisá^h が対立を示す。図 9- a と b がそれである。それぞれの音節の長さは,

balísa^h (= $C_1V_1C_2\acute{V}_2C_3V_3$)

(=不安)

$C_1V_1 = 71$ (msec)

$C_2\acute{V}_2 = 125$ (msec)

$C_3V_3 = 125$ (msec)

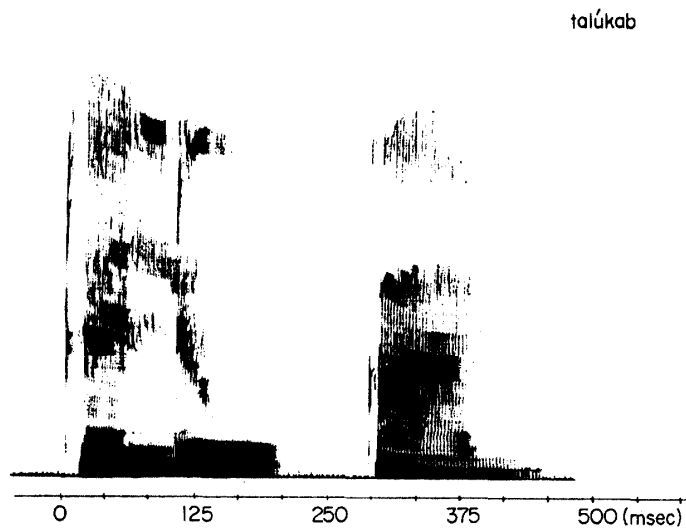


図 11

balisá^h (=C₁V₁C₂V₂C₃Ŵ₃) (=不安な)

C₁V₁= 42 (msec)

C₂V₂= 54 (msec)

C₃Ŵ₃=149 (msec)

上記の数値により明らかであるかであるが、アクセントがあるとされている音節の前は短くなっている。これも前に述べたアクセントのパターンと一致する。

(vi) C₁V₁C₂V₂C₃V₃C₄

図10 - a, b が示すように balátŋ と balátŋ が、アクセントにより対立している。

balátŋ (=C₁V₁C₂Ŵ₂C₃V₃C₄) (=豆の一種)

C₁V₁= 62 (msec)

C₂Ŵ₂=146 (msec)

C₃V₃=104 (msec)

C₄ = 96 (msec)

balátŋ

(=C₁V₁C₂V₂C₃Ŵ₃C₄)

(=手続上の間違い)

C₁V₁= 47 (msec)

C₂V₂= 62 (msec)

C₃Ŵ₃=125 (msec)

C₄ =104 (msec)

ここにおいても、アクセントの指定されている音節の前の音節は短くなっている。また、C₄の長さは III-(iii) で述べたように別の音節となっている。

ここで、アクセントによって対立は示さないが、語末の子音が閉鎖音の場合どうなるか、別の例を検討してみよう。

図11は、talúkab の例である。

talúkab

(=C₁V₁C₂Ŵ₂C₃V₃C₄)

(=かにのこうら)

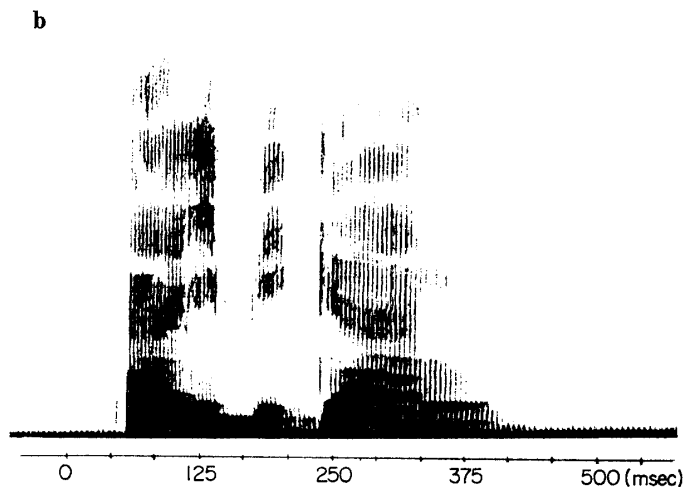
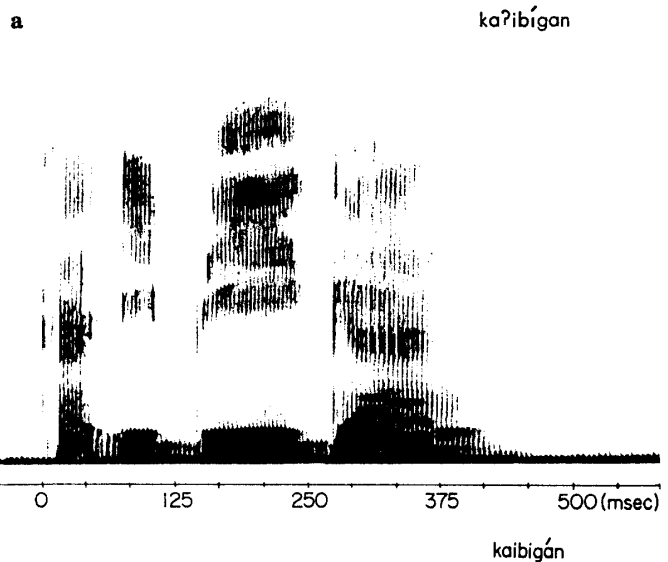


図 12

$$\begin{array}{l} C_1V_1= 50 \text{ (msec)} \\ C_2\acute{V}_2=125 \text{ (msec)} \\ C_3V_3=146 \text{ (msec)} \\ C_4 = 21 \text{ (msec)} \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} C_1V_1= 50 \text{ (msec)} \\ C_2\acute{V}_2=125 \text{ (msec)} \\ C_3V_3=146 \text{ (msec)} \\ C_4 = 21 \text{ (msec)} \end{array}} \right\} 167 \text{ msec}$$

となり、ここでも C_4 は前の音節の一部になっている。

(vii) $C_1V_1C_2V_2C_3V_3C_4V_4C_5$

kaibigan の場合には、アクセントを移動することにより異なる意味を持つ。この単語の場合、語構成的には ka-ibig-an と明らかに分かれる。ここでは、そのような構成法を無視して、いちおう一つの単語として分析してみた。図12- a, b を参照。

ka[?]ibigan (= $C_1V_1C_2V_2C_3\acute{V}_3C_4V_4C_5$) (= 友)

$$\begin{array}{l} C_1V_1= 50 \text{ (msec)} \\ C_2V_2= 58 \text{ (msec)} \\ C_3\acute{V}_3=133 \text{ (msec)} \\ C_4C_4=125 \text{ (msec)} \\ C_5 = 62 \text{ (msec)} \end{array}$$

一方、kaibigán のほうは、

kaibigán

(= $C_1V_1V_2C_3V_3C_4\acute{V}_4C_5$)
(= 好み)

$$\begin{array}{l} C_1V_1= 50 \text{ (msec)} \\ V_2 = 33 \text{ (msec)} \\ C_3V_3= 62 \text{ (msec)} \\ C_4\acute{V}_4=125 \text{ (msec)} \\ C_5 = 62 \text{ (msec)} \end{array}$$

(viii) 単音節語基 [Monosyllabic

Wordbase (or root)] の重複によって成り立っている場合。

単語全体を重複させる場合には、必ず後の単語のほうのアクセントが前の単語のアクセントに優先する。

図13- a, b はその例である。それぞれ、基本になる語基は

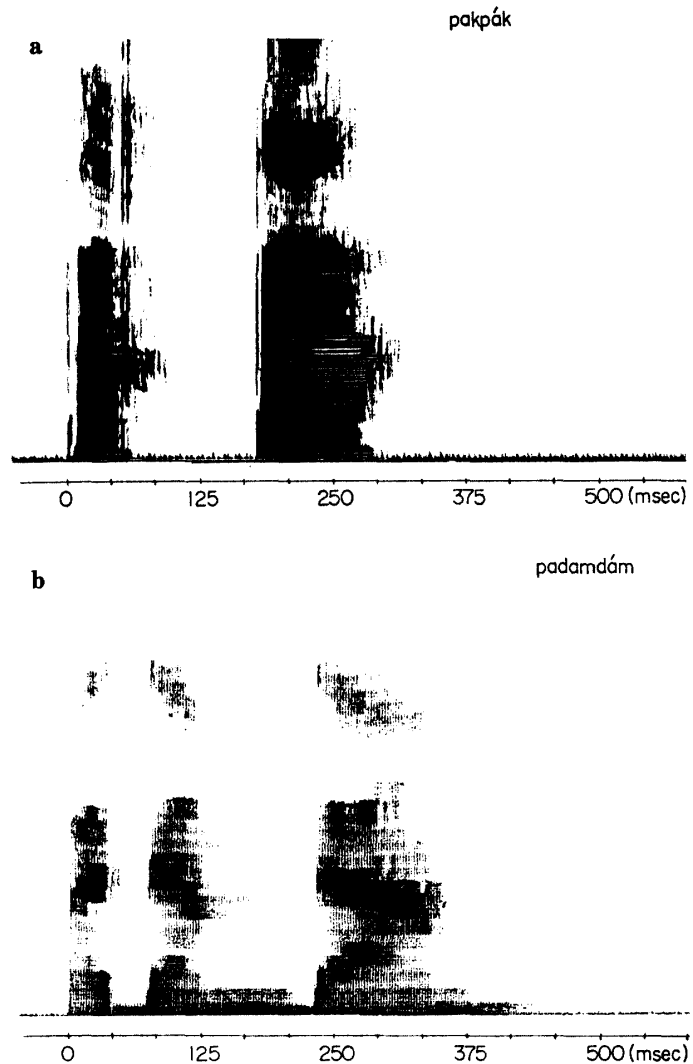


図 13

pak, dam であり、後者の場合はそれに接辞が付加されている。

pakpák (=C₁V₁C₂C₃Ŵ₂C₄) (=翼)

C ₁ V ₁ = 50 (msec)	}	99 (msec)
C ₂ = 49 (msec)		
C ₃ Ŵ ₃ = 166 (msec)	}	187 (msec)
C ₄ = 21 (msec)		

padamdám (=C₁V₁C₂V₂C₃C₄Ŵ₄C₅) (=感嘆の)

C ₁ V ₁ = 42 (msec)	}	133 (msec)
C ₂ V ₂ = 83 (msec)		
C ₃ = 50 (msec)		
C ₄ Ŵ ₄ = 125 (msec)	}	221 (msec)
C ₅ = 96 (msec)		

となり、前に述べたの CVCV タイプと同じ規則があてはまることがわかる。

参 考 文 献

- Bloomfield, L. (1917) *Tagalog texts with grammatical analysis*. Urbana, University of Illinois.
 Bowen, J. D. et al. (1965) *Beginning Tagalog*. Los Angeles, University of California Press.
 Gonzalez, A. (1970) "Acoustic correlates of accent, rhythm, and intonation in Tagalog." in *Phonetica* 22: 11-44.
 Llamzon, T. (1966) "Tagalog phonology" in *Anthropological Linguistics* 8: 30-39.
 —do.— (1976) *Modern Tagalog*. The Hague, Mouton.
 Lopez, C. (1941) *A manual of the Philippine national language*. Manila, Bureau of Printing.
 Potter, R. K., G. A. Kopp et H. G. Kopp (1947) *Visible speech*. New York, Dover Publications.
 Schachter, P. et F. T. Otones (1972) *Tagalog reference grammar*. Los Angeles, University of California Press.
 Trubetzkoy, N. S. (1939) *Grundzüge der Phonologie*. Prague. Travaux du Cercle Linguistique de Prague 7.